

研修目的

福島現状把握 自分にできることは何か

震災後二カ月がたち、震災直後には盛んに報道されていたものの、被災地から遠く離れた関西では日常が戻ってきており、伝わる情報は限られたものとなっている。

今回の研修の大きな目的は、福島に実際にいくことで報道では伝わってこない被災地の現状を把握することともに、復興のために自分ができることを見つけることである。

研修・作業内容

①被災の現場

- 被災地視察〔いわき市、南相馬市〕
- 「浪江のころ」の取材
- 生産者まわり〔大友農園、キュウリ農家さん〕

➤ 物販

〔新潟市古町商店街、喜多方市幸橋完成記念イベント、
GAMBARUZO! ふくしま〕

③分析

②支援の現場

- ガイドツアー参加〔裏磐梯五色沼〕
- 物資仕分け

➤ 避難所アセスメント分析

➤ シンポジウム参加〔福島大学〕

①被災の現場

今回の研修地は被災地の視察から始まり、被災地の視察に終わった。

○5/24 ニイダヤ水産の K さんらとミーティング



いわき市塩屋崎のホテル（二次避難所）でミーティングが行われる。

津波で加工場・自宅を流された K さんは事業再開の断念をほのめかすが、横田さんの励ましによって、(魚の)真空機さえあれば再開を考えるまでに話がまとまった。

写真はホテル最上階からみた津波被災地

気づき)

二次避難所¹を初めて訪れるが、普通のホテルに寝巻などとても生活感のある避難者の方がい

¹ 福島に来るまでその言葉を耳にしたこともなかった。

る光景が異様だった。また今回は津波による影響を受けた経営者の生の声を初めて聞くことができたが、放射能の影響で捕った魚が売れないかもしれないという福島特有の原発の問題に初めて触れることとなる。

○5/26 南相馬市の津波被災地視察



(後に取り上げる)自衛隊の炊き出し後、南相馬市の農家 S さん夫婦、N さん夫婦に被災地を案内していただいた。また現在の生活などについてもうかがうことができた。

写真は打ち上げられた船

気づき)

- ・津波の残酷さ² ・完全に経験を共有することのむずかしさ³
- ・原発事故が与えた影響の大きさ

とりわけ、農家の N さんの「昔はふるさとに誇りを持っていたが、今は持てない」、「毎年のようにやっていた農作業が急にできなくなる」などの言葉に原発のやるせなさを感じた。

○5/31 6/3 「浪江のころ」インタビュー



「浪江のころ」記者として、二人の方にそれぞれ一時間ほどインタビューした。

*「浪江のころ」とは：

浪江町民を取材し、今の生活や帰町に対する思いなどを共有することを目的につくられた広報誌（浪江町は原発事故発生時の対応が遅かったため、全国各地に分散避難を強いられている）

気づき)

- ・避難者も一人の人間

避難者の方も普通に生活をしている（買い物、観光、仕事したりする）ので、例えば

²何の跡形も残っておらず、全てを飲み込んでしまう

³ 南相馬出身の方は土地に愛着があり、元あった光景が分かる。だが自分は津波を実際に見たわけではないし、南相馬を知っていたわけでもない。

趣味の話などでも、合う人もいれば合わない人もいて本当に様々。ただ避難者には「家に帰れない」「いつ帰れるかわからない」という共通の苦しみが存在している。

・前向きな姿勢

避難生活は相当なストレスのはずだが、取材に行った一人の方の、くよくよ悩んでいてもしょうがないと前向きに生きられる姿勢がいい意味で驚きだった。応援するつもりが逆に励まされることになる。

・記者としての責任感

記事は取材者の思いを代弁する。特に「浪江のころ」は避難者の思いを他の町民に伝えるという企画であり、誤って伝えることは絶対避けなければならないため、普通に話を聞く場合と比べ、責任感、緊張感、またやりがいを持った。

○6/13 生産者まわり（福島市の大友農園さん、キュウリ農家さん）



サクランボの説明をされている大友さん

気づき)

・(風評) 被害の大きさ⁴ ・生産へのこだわり⁵ ・人としての魅力

・放射線の怖さ

放射能のために、作っても売れないかもしれないのが怖い。農家にとって土は命だが、一度汚染されると、その土地を除去する必要がある。だから補償ではなく土地を元に戻してくれさえすればよいという指摘が二人に共通しており、印象的だった。

・生活がかかっているものの必死さ

大友さんの知り合いなどはすでに廃業をいつにするかというレベルにまで追い込まれており、大友さんも生活がかかっているため、被害を何とか抑えようと必死である。しかし行政は被害の増減に関係なく給料をもらっているため、農家のような必死さがなく、動きがどうしても遅くなる。

⁴ 大友さんいわく、知り合いの観光農園は普段 4000 人の客が 300 人にまで減った。

⁵ 斎藤さんは、きゅうりに昆布だしやカツオだしの入った肥料をあげている。いわく、「人間がおいしいものは、きゅうりもおいしい」。そのきゅうりを試食させてもらおうと、みずみずしさと歯ごたえがすばらしかった。

②支援の現場

次に、研修ではさまざまな支援の現場に足を運ぶことができた。

○物販（5/28 喜多方市幸橋 5/29・6/12 新潟古町 6/4・6/5 GAMBARUZO! ふくしま）

5/28 喜多方



喜多方市幸橋完成記念に合わせたまつりに出店。ラーメンバーガーなど喜多方ならではの店も見られた。また橋に立って叫ぶ大声大会などもあった。

商品としては、カップラー、バンダイポップなどを販売。売上げ一万五千元

気づき）初めての物販。商品の知識もなく、ただ来たお客さんに売るだけに終わってしまった。これで本当に福島を支援していることになるのだろうか？

5/29 6/12 古町



新潟市古町商店街では毎週土日に福島物産市を開催している。

目的：風評被害に苦しむ福島の農産物を応援してもらうこと、新潟に避難している方に福島のものを提供すること。

ただ毎回異なる商品があり、憶えるのが大変！

売上げ：

5/29 二万三千元 6/12 二万七千元

気づき）

・買ってもらう喜び

5/29 前日同様ただ売るだけで、お客さんと話をするまでにはなかなか至らず ⇔

6/12 だんだん商品知識を憶え、接客にも慣れが出てくる。そもそもお客さんは興味を持って来てくださっているので、説明すると買ってもらえることが分かった。

・温かさ

「値段が高い」「品ぞろえが悪い」など言いながらも買ってくれる方の温かさを感じる。

6/4 6/5 GAMBARUZO!ふくしま



6/4、6/5 の二日間、猪苗代町のリステル猪苗代で復興イベント「GAMBARUZO!ふくしま」が行われた。物販の他にライブが二日間あり、盛り上がりを見せた。

素材広場では焼きそば、飲み物(パンダイ・ポップ)を販売。

売上げ：6/4 十万 6/5 九万

気づき)

・役割分担の難しさと声かけの大切さ

参加人数が多かったため、焼きそばづくりでは焼く係、盛りつける係などに分かれたが、少し作業が遅れると全体の流れに支障をきたす。そこで声をかけながら臨機応変に対応していくことの必要性を感じることができた。

・それぞれの立場からの支援 (歌手、パントマイム、バルーンアート)

○6/9 ガイドツアー参加



裏磐梯エコツーリズム協会主催のガイドツアーに参加。五色沼をガイドの方と一緒に歩く。

ツアーには、近くに避難されている浪江町の方も参加された。

気づき)

・それぞれの立場からの支援

協会会長「自分の仕事はガイドだから、自分にできるのはガイドを通じて避難者の方に少しでも気分転換してもらおうこと」

ツアーでは参加者の方が（自分も含め）日常を忘れ、自然を満喫することができた。

○5/25 5/27 物資仕分け



元気玉プロジェクト本部にある物資の仕分け作業。ここには全国からおもちゃや服などの支援物資が集められている。

私：主におもちゃの仕分けを担当。おもちゃは避難所へ持っていかれ、子どもの遊び場ボランティアの方たちが子どもと遊ぶために使われる。

気づき)

・「とりあえず」の支援は役に立つとは限らない

送られてくる支援物資は使い古しもあれば新品もあり、明らかに不要と思われるものもあれば、まさに必要とされているものもある。余った物資は下手に処分もできないため、本当に受け取る相手のことを想像しての支援が重要。

・支援者・被災者間をつなげるシステムの必要性

必要なものの情報を細かく調査し、支援者に伝えるシステムがあれば、支援者の善意を無駄にすることもない。

他にも…

○5/26 自衛隊炊き出し：南相馬市で作業する自衛隊の方のため、ザクザク煮等を作る

③分析

必要な被災者支援の分析、また報告を聞く機会が得られた。

○6/9, 10 6/14～16 避難所アセスメント分析



素材広場からは私が中心となって参加した元気玉プロジェクトでは、四月の初めから末にかけて一次避難所・二次避難所のアセスメントを行った。

その結果から導き出される傾向や必要となる支援は何かを、数値的に導くという作業を私は担当した。なお、作成資料は成果として元気玉へ提出した。

気づき)

・ 数字に表れるもの、表れないもの

アセスメント結果を読んでいると、避難者の方がどのように思って何を心配されているかがしみじみと伝わってくる。ただ、データを数値化するには、ある程度のカテゴリ化⁶が必要となる。一人の話が全てではないが、一人の話が何百分の一の価値しかないわけでもない。

・ 自分にできることは何か

元気玉ではそれぞれの専門を生かした活動をされている（JICA：行政とのネットワークづくり、NICE：子どもと遊ぶボランティア、TOSS：学習支援ボランティア、江川さん：中間支援組織としての元気玉の仕組みづくり）。

ただ、私は自分が何をできるかわからず、常に江川さんの指示を仰ぐばかりだった。したいのは避難者の声を聞くことだったが、今はアセスメントも行われていない。そんな中、「アセスメントの結果を見せてください」と頼んだことから実験的に分析をやらせてもらうことになる。

アセスメントの分析ははじめてだったが、「やります」といった手前引き下がることもできず、結果的にそれなりのものを作ることができた。

○6/11 東日本大震災災害復興シンポジウム



関西学院大学の山中教授の後、郡山市にあるビックパレットふくしま、東山温泉の原瀧、福島大学それぞれの避難所としての報告があった。

山中教授は、国主導ではなく被災者主導の復興が重要であることを強調された。

またそれぞれの避難所では少しでも被災者のためにという思いからの様々な取り組みが報告された。

気づき)

・ 本当に被災者のためになるとはどういうことか

そもそも「被災者」とひとくくりにできない以上、簡単には言えない。

研修を振り返って

⁶例えば「生活の不安」という項目だと、「会津に来て仕事が見つからない」「前の仕事がどうなるか不安」などの回答があるが、それを「仕事への不安」というようにひとくくりにする

・ Re 自分にできること

今回の研修は、福島は人手が足りておらず、とりあえず行けば何かやることがあるだろうという軽い気持ちからの参加だった。ただ、福島の現状についての知識=ゼロ、仕事やボランティア経験=ゼロからのスタートでは、すぐに役に立つことはできず、逆に、仕事の段取りや報連相の大切さ、モノの売り方や人生の考え方など学ぶことが非常に多く、思っていた以上の「研修」となった。

・ 本当の支援とは

今回は被災の現場から支援の現場の体験、またどのような支援が必要かの分析までやらしてもらった機会を得たが、やはり支援には完全に正解・誤りはないと考える。となると、自分ができる、必要だと考えることをやるしかない。

私が最も応援したいと考えるのは、風評被害にあって買われることのない福島の農産物であり、その被害を抑えるためにできることは何かをこれから考えていきたい。具体的にはサクランボ狩りツアーなど。

・ 最後に

研修を振り返って一番思い出深いのは、寮での他のインターン生との生活である。毎日全員でご飯をつくり、食べ、話すという生活はいつになく楽しいものだった。今回の出会いを大切にするとともに、このような空間、「場」をどのように作ることができるかを今後大学で考えていきたい。